

見知らぬヒトとは口をきくべからず

M・ブルガーコフ

二〇三〇年、五月〇〇日、午〇〇時。

麻暮正作は長大で巨大なコードの中にいる。
何日の何時か解らぬのは、完璧な闇だからである。
闇のなかの闇。

これ以上の闇は、作ろうとしても作れないであろう。
それでもまだ五月中であることは、麻暮には解っていた。
なぜなら、江ノ島の海に墜ちてから、麻暮は一度も気を失ったりはしなかったからである。

よって、どうしてこうなったかの認識もあった。
以前、竹田金之助がミニ爆弾で開けた小穴から、自然に入り込んだのである。
やはり海水も共に烈しく雪崩込んだが、防水壁のために、すぐに止まった。
どこにも怪我がなかった麻暮は、長い間コードの中を調べ廻った。
しかし、制御室のコンピュータが稼動していないのだろう、灯りは見つからず、
コードの根元にあるはずの、未来計画カンパニーのビルに繋がる出入口も、すでに塞がれていた。

それらはすべて麻暮が金之助に指示していたことなので、仕方がなかった。
だいたい、こうして生きていること自体が計算ちがいなのだった。
(ともかく、金之助、玄治、郷田狂介の三人が、じつにうまくやってくれたのだ)
麻暮はそう信じて、
(あとは餓死を待つばかり)
と観念した。

(あるいはその前に放射性物質にやられるか)
麻暮の身体は、放射性物質を受け付けない。
けれども、鉄仮面がはずれた顔だけは、どうしようもない。
顔と云うよりも、目も鼻も口もどこにあるかわからぬ、生肉の塊であるのだが。

そのとき、コードの奥から音がした。

(いや、音ではなく声かもしれない)
なにやら呻き声に聞こえる。
声だとしたら、
(荒野大三郎も生きているのだ)
麻暮は呻き声のほうへと、いざりながら進んで行った。
呻き声はしだいに大きくなり、そのなかみも麻暮には聞こえた。
「闇ジャ、闇ジャ。
地獄ジャ、地獄ジャ。
コレガ、世界ノ終ワリナノカ」
麻暮は思わず苦笑して、
「荒野大三郎、生きていたか。
これは君の終わりかもしれないが、世界の終わりではないよ」
「嗚呼。
ソノ声ハ、麻暮サンデスネ。
地獄デモ一緒トハ、ワタシモツイテイマセンネ。
プフイ」
「ケケケ。
相変わらず減らず口だね」
「黄金仮面ガ、ハズレタカラ、ロガヨクマワルンデスヨ。
マワルダケデナク、何カロニ、イレタクナリマシタネ」
「こんなところに飲食などあるのかい」
「麻暮サンモ俗人デスカラ、オ腹ガヘッタデショウ。
コードノ壁ニ、食糧庫ヲツクルヨウ、指示シテアリマス。
左右ノドチラカ、ワカリマセンガ、一緒ニサガシテミマセンカ」
「いいだろう。
ボクは右の壁を、君は左の壁だ」
「ワタシハ今ウゴケマセンカラ、麻暮サン、オネガイシマス」
「いいだろう。
ボクが左右の壁を確認してみよう。
懐中電灯はないのかい」
「ソレガナイノハ、幸運デス」

食糧庫はあんがい容易く確認できた。
鍵もかかっていなかったのので、麻暮は扉を開けた。
「これはミネラルウォーターかな。
それとも葡萄酒かな」
「両方デス」
「パンもクッキーもチョコレートもあるな。
この多量の缶詰は何かな」

「肉ト魚ノ缶詰デスヨ。
瓶詰モアルデショウ、ソレハ果物」
「どのくらいあるのか見当もつかん」
「百人ノ十日分ノハズデス」
「二人なら一年分か」
「五百日分デス。
酸素モ同量。
麻暮サン、算数ガ苦手デスネ」
「ボクに苦手なものなんかないさ。
ボクは大食漢だから、そう言っただけさ」
負け惜しみっぽい麻暮の言葉に、荒野の笑い声がコード内に響き渡った。
「そんなに愉快かい」
「愉快デスネ。
麻暮サント、最後ノ晚餐ヲ、五百日モデキルノデスカラ。
プフイ」
「ボクは不愉快だね。
君とそんなに長く一緒にいたくはないからね。
尤も、ここで君の息の根を止めるって方法もあるが」
「デモ、オタガイ、顔ガミエナイカラ、憎悪モ五百分ノ一デショウ」
「まあ、そういうことにしておこうか。
とにかく、いただくでしょう」

麻暮は、葡萄酒を一本丸飲みしながら、乾パンとと鯖の缶詰と梨の瓶詰を食べた。
荒野は、ミネラルウォーターとクッキー少々だけだった。
「その程度じゃ飢え死にするぜ」
「私ハ、コンナモノデ充分ナ、身体ナノデスヨ」
「そいつは便利だね」
一呼吸置いてから荒野は、独り言ふうに呟く。
「今サラノ話デスガ、麻暮サンハ、ドウシテ私ヲ、ココマデオイツメルノデスカ」
麻暮も一呼吸置いてから、おもむろに答える。
「それはボクが探偵だからよ。
旧知の山内参三に依頼されたのがきっかけだが、その対象が妹を殺した男だった
からなおさらさ」
荒野は沈んだ声で、
「正直デスネ。
デモ私ハ、アナタノ仇デハアリマセン。
私モ正直ニ云イマス、アノヒトハ私ノ唯一無二ノ人デシタ。
麻暮サンハ、私ガアノヒトヲ殺シタト、信ジテイルヨウデスガ、実ハアノヒトハ
自殺デス。

ドウシテ自殺ナンカト、ソレヲ質問サレル前ニ、オ答エシマシヨウ。

プフイ。

私ハ死ヲ極端ニ、怖レテイマシタ、ハイ、今デモ。

アノヒトハ、ソレナラ自分ガ死ネバ、ソノ恐怖カラ私ガ解放サレルト、考エタノ
デス。

私ガ、アノヒトニトッテ、不可解デ不愉快ナ、活動ヲシテイルノモ、耐エラレナ
カッタノデス。

信ジラレナイデシヨウガ、信ジラレナイ事ガ真実ナノデス」

麻暮は深い溜息をついてから、

「信じてみよう。

信じてみるとして、君はそれで解放されたのかね」

「駄目デシタ。

前ヨリモ、酷クナリマシタネ。

ト云ウノハ、私ガ死ネバ、アノヒトモ完全ニ死ンデシマウト、考エタカラデス」

「とんだ純情話を、ここにきて聞かされるとは思わなんだよ。

ケケケ」

「誰ニ云ッテモ、信ジテモラエマセンヨネ。

デモ、アノヒトノオ兄サンナラ、私ノ事ハ理解デキナイマデモ、アノヒトノ気持
ハ解ッテモラエルデシヨウ」

「嗚呼、嗚呼。

莫迦なやつだよ。

しかし、可愛いやつだったよ」

「アノヒトガ死ンデ、気ガ狂ウホド、悲シカッタノハ、麻暮サンデハナク、他ナラ
ヌ私ナノデス」

「何とでも云え。

ボクは人間の台詞を、信じないことにしている」

「トコロデ、ドウシテ探偵ナンゾニ、ナッタノデスカ」

荒野の声は相変わらず沈んだままだった。

「なんぞは余計だね。

ボクはこれでも読書家でね。

ケケッ」

麻暮はあえて明るい声を出した。

「ソウデスカ。

ソレナラ、江戸川乱歩デモ読ンデバカリイタノデスカ」

「ボクが、明智小五郎に似ているかね。

容姿は、金田一耕助だろうが。

そりゃ、横溝正史も読んだし、ポアロもホームズも好きだが、ボクはチャンドラ
ーだね」

「ナルホド。
フィリップ・マーロウ。
ドウリデ、麻暮サンハ、タフガイデス」
「ボクは頭が悪いからねえ。
精神力と肉体力が総てよ」
「映画、観マシタヨ。
ハンフリー・ボガード、〈三つ数えろ〉。
依頼者ノ娘ガ、トテモ背ガ高イノネ、ト云ウデショウ」
「ボギーは答える。
私は小柄なほうだ、次は竹馬に乗ってこよう。
あそこはボクのお気に入りだね」
「沢田研二ガ、歌ッテイマスネ」
「妹は、ジュリーの大ファンだったな。
ボギー、ボギー、あんたの時代は良かったァ〜」
「麻暮サン、歌ウマイデスネ。
デモ、麻暮サンノ時代ハ、トックニ終ワッタノデス」
「莫迦な。
それなら、君の時代は終わっていないというのかい。
もし荒野大三郎の時代が続くのなら、ボクの時代も続くのだよ。
ケケケケ」
「マーロウ顔負けノ、シツコサデスネ。
私ハ、ボギーノ映画デハ、〈カサブランカ〉ト〈麗しのサブリナ〉ガ大好物デス」
「君は、甘いねえ。
しかし、それで解った。
荒野大三郎の悪行は、ロマンチストの悪行」
「当タラズトモ、遠カラズデショウカ。
デモ、大好物ト大事業ハ別物デス」
「大事業ねえ。
困った大事業だな」
「〈大脱走〉ガイイデスネ。
二人ダケノ大脱走」
「脱出するすべはないな、今のところ。
ともかく 〈三つ数えろ〉」
「ハイ。
一、二、三、オシマイ」
「冗談を言っている状況か。
君の好きな映画を、三つ数えろという意味だ」

しばらく間を置いて、荒野は疲れた声で、

「ソレデハ、命令ニ従イマスネ。

〈ローマの休日〉〈昼下がりの情事〉〈暗くなるまで待つて〉デスカネエ」

「ふーむ。

外国映画ばかりか。

オードリー・ヘップバーンばかりか。

安易だねえ。

しかも最後の一本は洒落かね」

「ナラバ、麻暮サンハ」

「ボクは、〈日本橋〉〈秋刀魚の味〉〈白痴〉だね。

市川崑、小津安二郎、黒澤明監督。

うーむ。

実に完璧な選定」

「〈日本橋〉ハ、オヤジガ蛆ヲ食ウトコロヤ、自分ノ血ヲ乳児ニ飲マセル所ガ凄イ。

マルデ麻暮サンガ、ヤリソウナ事デ。

〈秋刀魚の味〉ハ、秋刀魚食ウ所ガ、出テコナイノガ、ケシカラン。

〈白痴〉ノ評判ハイマイチデスガ、黒澤明ノ映画デハ、ベスト・スリーカナ。

因ニ、他ノニツハ、〈野良犬〉〈酔いどれ天使〉。

タシカニ、外国映画ハアリマセンガ、〈白痴〉ハ、ドストエフスキーノ原作デスネ」

「ケチがついたな。

それなら、〈蜘蛛巣城〉」

「アレハ、シェークスピア原作」

「くそっ、ボクの認知症頭脳では、君の人工知能にはかなわん」

「正確ニハ、DNA頭脳＋I T頭脳」

「どうでもいいが、どうせならお互いもっと、マニアックなものを選ぼうじゃないか」

「ナラバ、私ハ、〈フレンチ・コネクション〉〈カンパセーション〉〈パルプ・フィクション〉」

「ションで語呂合わせしたな。

いかげんな選択だ、いやいいかげんな洗濯だ。

汚れが落ちない感じだよん。

ションベンしたくなった。

フレンチは刑事映画の傑作だが、主人公が暴力的すぎる。

カンバも傑作だが、長い盗聴、というよりも長い退屈。

君は、ジーン・ハックマンが好きなようだね。

ボクも好きだよ、まるで君のキャッチフレーズみたいな、〈許されざる者〉もね。

パルプも傑作だが、主人公が途中で死んじゃって、観客に失礼。

クエンティン・タランティーノ監督は、〈レザボア・ドッグス〉が最高傑作だね」

「ソウイウ見方モアリマスガ、別ノ見方モアリマス。

「因ニ便所ハ、一キロメートル先デヨロシク」
「そうするとしよう」
「ソレハソレトシテ、ナラバ、麻暮サンハ」
「ボクは、〈七つの弾丸〉〈女が階段を昇るとき〉〈清作の妻〉だな。
どうじゃ、まいったか、観たことあるめえ」
「順ニ、三国連太郎、高峰秀子、若尾文子主演デスネ。
ナカナカノ選択デスガ、洗濯機ガ壊レテイマスヨ。
プフイ」
「君の精神ほどは壊れてはいないさ」

「荒野は、深い溜息をついてから、
「ソレナラ壊レツイデニ、女優ノ話デモシマシヨウカ」
「〈勝手にしやがれ〉」
「意外デスネエ。
麻暮サンハ、ジーン・セバーグ、好キナノデスカ」
「ジーンは、権力者に殺されたという噂だね。
そういうところは理想だがね。
ボクの好みは、〈ヘッドライト〉のフランソワーズ・アルヌール」
「古イ古イ。
ケレド、イイ好ミデスネ。
デモ、外国ノ女優デスカ」
「日本の女優の名前は忘れかけている。
そうそう、原節子」
「彼女ハ、麻暮サンノベスト・スリー、〈白痴〉ノ女優デハナイデスカ」
「そうだったかな。
ボクは、なんとか物語の原節子を覚えている」
「〈東京物語〉」
「それぞれ。
それから〈晩秋〉と〈麦春〉よ」
「イエ。
〈晩春〉ト〈麦秋〉」
「くそっ。
似たようなもんじゃ」
「女優トシテノ原節子ハ、〈めし〉ガ一番デス。
アノ倦怠ガ、人生ノ倦怠トイウモノデス」
「大根女優と云われていたがね」
「アレガ大根ナラ、他ノ女優ハ、ミンナ人参デス。
プフイ」
「まあいいから、君の役目を果たしな」

「ナメタラアカンゼヨ。

日本ノ女優ナラ、夏目雅子」

「早世したがね」

「二十七歳デ死ヌノモ、百歳デ死ヌノモ、一億光年ノ宇宙ノ歴史カラ見ルト、同ジ
デスヨ」

「そんなことはない。

演技派の夏目雅子は、歳を重ねて、晩年の田中絹代になれた。

ボクも本当は夏目雅子が好きだね」

「私ハ本当ハ、〈美女と野獣〉ノ、ジョゼット・ディ」

「ケッケ。

レア・セドゥでもエマ・ワトソンでもないんだね。

古い古い、ジャン・コクトーの〈美女と野獣〉だ。

そう言えば、あのジャン・マレーの野獣は、君にそっくりだね」

「失礼デスネ。

麻暮サンニ、ソックリナンデスヨ」

「あれは〈野獣と美女〉とすべきだな。

君にしるボクにしる、トップでなくっちゃおさまらない。

ダブル主演というのも、厭だね。

君かボクか、主演は一人。

少なくともタイトルに、美女は要らない。

実際、物語は野獣のほうにあるんだよ」

「ハイ。

シカシ、〈野獣〉デハ、観客ガ入りマセン」

「そうかなあ。

女嫌いのボクにはわからん」

「ソウシテ、アノヒトニ似テイルノハ、〈道〉のジェルソミーナ」

「ああ、似ている」

麻暮は素直に応じた。

「結局、アノヒトハ、十字架ニカカッタ、キリストダッタノデスヨ」

「それは、それは、そうかもしれん」

麻暮はしみじみと言った。

「珍シク、意見ガ一致シマシタ」

「それでは、厭だが、君の瞳に乾杯」

麻暮は、葡萄酒のボトルを掲げて、それから喇叭飲みした。

「トコロデ、最近観タ映画ハ、何デショウカ」

荒野の声に多少生気が戻ってきた。

麻暮はそれを内心悦んだ。

「こんな恰好で映画館に行けるもんかい。

ケケケ」

「DVD、トイウモノガ、アルデショウ。

プフイ」

「そんな悠長な生活を送ってこなかったんでね」

「私ハ、DVDデ、昔ノ映画ヲ、ヨク観マシタネ。

私ハ、テオ・アンゲロプロス監督ガ好キナノデス。

〈旅芸人の記録〉〈アレクサンダー大王〉〈シテール島への船出〉〈霧の中の風景〉〈狩人〉〈ユリシーズの瞳〉〈永遠と一日〉〈エレニの帰郷〉〈惑星ソラリス〉。

コレラノ深イ哀シミハ、私ノ心象世界ソノモノデス」

「君に哀しみなんかあるのかい。

それと、ボクの記憶が確かなら、最後のやつだけは、アンドレイ・タルコフスキーじゃないかな」

「ソウデシタヨネ。

タルコフスキーモ、イイデスネエ。

〈ノスタルジア〉〈サクリファイス〉。

ソレカラ、麻暮サン、ツマリ、〈ストーカー〉」

「失礼な。

ボクはストーカーじゃなく、探偵」

「探偵トイウノハ、ストーカーデショウ。

プフイ。

拳銃バンバン、ヤルワケデナシ」

「当たっているから憎らしい。

それでは、探偵映画のベスト・スリーを」

「誤魔化シマシタネ。

イイデショウ。

ト云イタイ所デスガ、私ハ、探偵ガ活躍スル映画ヲ、好ミマセン。

探偵ガ、憤死スル映画ナラ、イイデスガネ。

ドンナ探偵映画デモ、麻暮サン以上ノ探偵ハ、出てキマセンシ」

麻暮は闇の中で頷き、

「それもそうだな。

君ほどの悪党も出てこないしね。

それなら、血腥い君にお似合いの、戦争映画ベスト・スリーを」

「ソレハ簡単ニ出マス。

テレンス・マリック監督 〈シン・レッド・ライン〉、スタンリー・キューブリック監督 〈フルメタル・ジャケット〉、オリバー・ストーン監督 〈プラトーン〉、コレハ、戦争映画トイウジャンル、カドウカ、別途ベスト・スリーハ、ジッロ・ポンテコルヴォ監督 〈アルジェの戦い〉 マイケル・チミノ監督 〈ディア・ハンター〉、スチーブン・スピルバーグ監督 〈シンドララーのリスト〉」

「意外や意外。

ボクは、フランシス・コッポラの〈地獄の黙示録〉を期待したんだがねえ。
マーロン・ブランド演ずる大佐は、荒野大三郎の原点じゃないかと考えていたんだがねえ」

荒野は答えず、

「麻暮サンハ」

「ボクは君と違って、血腥いのは駄目なんだ。

まあ、〈西部戦線異状なし〉〈パットン大戦車軍団〉〈地上より永遠に〉なんて映画を選びたくもないしなあ。

代りに、影響というか感化を受けた三本、なんてテーマはどうかね」

「ソレハイイデスネ。

私ガ私ヲ語ルヨリ、ソウイウ映画ヲ語ッタホウガ、私ヲ理解シテモラエソウデス」

「共感はしないだろうが、理解くらいはするさ」

「デハ、最高ノ三本ヲ。

コレラハ、常ニ想起シテヤマナイ、謎メイタ映画デス。

ソノ謎ハ、人間ノ謎、人生ノ謎、デアリマス。

マズ。

ビクトル・エリセ監督ノ、〈エル・スール〉。

重ク、深ク、奇跡的ナ作品デス。

娘ノ視線デ観ラレル、慈シミ深イ父ヲ演ジルノハ、オメロ・アントヌッティ。

私ノ一番好キナ、男優デス。

主人公ノ過去ニハ、戦争ガアリ、確執ガアリ、失恋ガアリ、人生ノ苦悩ガアリマス。

コノ俳優ガ、禿頭ナンデスヨネ。

禿頭ガ、何ラ、マイナスデハナイトイウ、証明ヲ示シシテクレマス。

私ハ、禿頭ニ、イエ、コウイウ人間ニ、ナリタカッタ。

ソレカラ。

デヴィッド・リンチ監督ノ、〈エレファントマン〉。

何シロ、今ノ麻暮サンヤ私以上ノ、凸凹、グチャグチャノ、醜サデスカラネエ。

人間容姿ジャナイ、トイウ気持ト、ヤッパリ容姿カナ、トイウ気持ニ、分裂シマシタネ。

エレファントマンノ、ジョン・ハート、モ凄イガ、エレファントマンヲ、見世物小屋カラ救イ出ス、医者役ノ、後ニ名優トナッタ、ナルベクシテナッタ、アンソニー・ホプキンス。

ソノ医者ノ表情ダケデ、エレファントマンノ地獄ガ、解ルノデスヨ。

私ハ、全世界ノ不幸ヲ一身ニ背負ッタ、エレファントマンニモナリタカッタガ、救世主ニモナリタカッタ。

ソウシテ。

パトリス・ルコント監督ノ、〈髪結いの亭主〉。

男ハ誰デモ、髪結イノ亭主ニ憧レマスガ、滅茶苦茶セクシーデ、コヨナク優シイ、

素敵ナ素敵ナ、アンナ・ガリエナノ亭主ナラ、モウ死ンデモイイ、ト思ウデショウネ。

ケレドモ、死ンダノハ、髪結イノ方デ。

唐突ナ死。

理由ハ判然トシナイマデモ、精神不安定トカ何トカヨリモ、不幸ニナル前ニ死ヌ、幸福ノ絶頂デ死ヌ、ソナ理想、思想ガアッタノカ。

ソレトモ、理想ヤ思想ハ、全部亭主ノ意識ノ中デ、髪結イニ、コレホド愛サレタ、ソウ捏造スル、空想スル事ガ、生キル糧ナノカ。

イズレニシテモ、観終ワッテ、ナリタカッタノハ、髪結イノ亭主デハナク、髪結イダッタ、ト知ッタモノデシタ」

荒野の声は、なぜか若者の声だった。

麻暮は、自分も若造になった気分でした。

「難しい理屈は結構。

なんじゃ。

みんな主人公が自殺する映画ではないか」

「タマタマ、デショウ」

「たまたまには思えん。

おぞましき、【死んだる団】を思い出したよ」

荒野は話を逸らし、

「ソレヨリモ、今度ハ、麻暮サンデス」

「自分で云っておいて何だが、ボクは三本と云うよりも、高倉健だね」

「アラマ」

「そんな声を出さんでくれ」

「私ハ、テッキリ、〈キートンの探偵学入門〉カトバカリ」

「それは先入観だね。

あの映画は、ボクの生まれる前のものだよ」

「高倉健ハ、随分ト麻暮サンノ、イメージト違ウ」

「ボクのイメージねえ。

そんなものがあるなら教えてくれよ」

「麻暮サンノイメージハ、チャップリン、キートン、渥美清」

「ふん。

それは、ボクの外見的イメージだね。

ボクの内面的イメージは、ジョン・ウエイン、三船敏郎、高倉健さ。

高倉健の素晴らしさと云うのは、共演した女優や脇役の男優が、みんな輝いて見えることだよ。

その理由は判然とはしないが、おそらく高倉健の俳優としての存在感や、抑制された演技のためではないかな。

たとえば、男優は多すぎるから、やめておいて、輝ける女優と云うのは、〈動乱〉の吉永小百合、〈冬の華〉の池上季実子、〈幸福の黄色いハンカチ〉の倍賞千恵子、

〈駅・STATION〉のいしだあゆみ、〈夜叉〉の田中裕子、〈居酒屋兆治〉の大原麗子、〈あ・うん〉の藤純子、〈鉄道員（ぽっぽや）〉の広末涼子等々で、こういう俳優は、他にジャン・ギャバンしかいないね」

「麻暮サンハ、高倉健ノ任侠映画ガ、大好物ナノカト。

〈日本侠客伝〉〈昭和残侠伝〉」

「ボクに限らず、ボクの世代はみんなそこから入るんだよ。

ボクの後世代は、〈仁義なき戦い〉。

だから、仁義があるのは、ボクの世代までだね」

「私ハ、任侠映画ナラ、池辺良。

健サンヲ凌グ、侠客ブリ」

「だから、そういうことも、高倉健のお手柄なのさ」

「プフイ。

ナルホド。

ソコデスカ。

確カニ、麻暮サンノ共演者、イエ、関係者ハ、皆サン輝イテイマシタネ。

山内参三サン、舟木英介サン、郷田狂介サン、小林金助サン、竹田金之助サン、玄治サン、大変魅力的デス。

ソレニ較ベテ、私ノ関係者ハ、川上宙衛門、木下弁太郎、川上宙門、木下太郎。

ダイブ見劣リシマスネ」

「随分と謙虚ではないか」

「謙虚ハ、生マレツキデス。

謙虚ナラ、決シテ検挙サレルコトハ、アリマセン」

「検挙されなくとも、荒野大三郎の末路は自殺だな。

さっきの映画三本が、それを証明してくれるよん」

「オソラク私ハ、実ニ慈シミ深く、最高ニセクシーデ優シク、誰ヨリモ美的ナ存在デスガ、自殺ダケハシマセンネ

プフイ。」

「するね。

君は何よりも、殺人者だ。

殺人者は、最後には自分を殺す。

他人の死の観察に飽きて、自分の死を見極めたくなるのだよ」

荒野はやや間を置いてから、

「哲学的ニナッテキマシタネ。

ソレデハ、麻暮サンハ私ニ、私ハ麻暮サンニ、観セタイ、人生ノ一本ヲ、イカガデショウ」

「いいだろう。

ボクは、〈ストレンジャー・ザン・パラダイス〉だね。

何か起きそう起きない。

若い男女三人が出てくるが、三角関係なんかない。

殺人も恋愛も変貌もない。

実にいい空気感だよ。

人生は、霧がかかって、見えない、解らない。

何も起こらなくて、何も見えない、解らない。

それでも人生は、いいものだ」

麻暮はまだ喋るつもりだった。

(君に観せれば、そのおぞましい思想が、いや死想が、変わるかもしれない) 云々と。

荒野の言葉に遮られた。

「ジム・ジャームッシュ。

アノ監督ハ、確カニ哲学者デスネ。

デモ、人生ハ、ソナモノデハアリマセン。

人生ハ、イツ殺人ガ、イツ恋愛ガ、イツ変貌ガ、起コルカ。

実ニイイ空気感ナンテ、人生ノモノデハナク、虚構ノ、映画ノ中ノモノダケデス」

「なんだ、観ていたのか。

それはそうなんだ。

ボクだって、君のおかげで、ご存じのように、血と汗と涙の人生だった。

君は、ボク以上に、異常な人生だったはずだ。

しかし、そういう人生に、そういう生き方に、否をつきつけているのさ。

人生、何もなくても、それだけで充分素晴らしい。

人間、何もしなくても、生きていてだけで、それだけで充分面白い」

「日本映画デハナイノデスネ。

私ハ、サッキ〈めし〉ガ出タカラ、成瀬巳喜男カト。

成瀬ノ〈浮雲〉」

「ペシミストだからなあ。

ボクはその反対だからねえ」

「オポチュニスト。

プフイ。

オポ映画。

デモ、人生ノ映画デハアリマスネ。

ソレデハ私ノ、人生ノ一本」

ここで荒野はしばし沈思黙考した。

麻暮はべつだん苛つく風もなく、

「早くしないか。

ボクたちの残り時間は少ない。

ただし、ペシ映画はやめてくれよ。

気が滅入る」

「ハイ。

ナカナカー一本ニ、絞りコメナクテ。
テオ・アンゲロプロス、アンドレイ・タルコフスキー、ビクトル・エリセ。
我ガ人生ノ監督ガ、出テシマイマシタカラ。
ソレデ、チャールズ・チャップリンニシヨウカト。
チャップリンノ映画ハ、人間永遠ノテーマデスカラ。
デモ、ウディ・アレン映画ニシマス」
「そりゃ、そうだろう。
チャップリンの正義感は、君には似合わない。
アレンのコンプレックスが、よく似合うよ。
ケケッケ」
「ナントデモ。
アレンノ〈カイロの紫のバラ〉デスネ。
スクリーンノ中ノ男ガ、飛び出シテ来テ、観客ノ女トツキアウ。
コレこそ、人生デスヨ」
「ううむ。
どうしてもボクに対抗したいんだな。
それならヴィム・ヴェンダースも好きだろうな。
男の天使が現れて、空中ブランコ乗りの女に惚れてしまう話」
「アア、〈ベルリン・天使の詩〉デスネ。
アア、天使ハイイデスネエ。
天使ハ、悪魔ノ子供デスカラ」
「意味がわからん」
「ソレハ麻暮サンガ、意味ヲ考エルカラデス。
無意味ナノガ人間、無意味ナノガ人生ナノニ」
「無意味なら、無意味らしくしろよ。
君は、君の無意味を、人類に押し付けようとしてはいないか。
無意味なら、無意味な行動はやめて、淡々と生きろよ」
「好々爺ノヨウニ、デスカ」
「好人物のように、だよ」
「プフイ。
ソノ言葉、ソックリ麻暮サンニ、アゲマス。
アナタハ、好人物ニナレナイドコロカ、好人物デアルハズノ、金助サンヤ金之助
サンナドカラ、好人物ノ肩書キヲ剥イデシマッタ」
「わかったような口をききやがって」

妙な空気が充満した。
二人は黙した。

そのとき。

まったく、何の前ぶれもなかった。
「おいおい。
君、ボクのおかまを掘る気か」
麻暮は身悶えした。
「ソナ趣味ハ、アリマセン」
「それなら、ボクのお尻で蠢いているものは何だ」
麻暮は大声をあげた。
荒野は淡々とした声で、
「痔ガ悪化シタノデハ」
「痔なら完治している。
何じゃこりゃ」
「鼠ハ、イナイハズデスガ」
「闇の中では、どいつもこいつもおぞましい。
君の部下か、それともロボットか」
「部下ハ、玄治サンニ、殺サレタジャナイデスカ。
ロボットハ、岬美々サンニ、乗ッ取ラレマシタ」
「それなら、こいつは何者じゃ。
鼠でなければ、猫か」
闇の中から声がする。
動物アニメーション映画の、声優風の声。
{あたり。
おれ、やみねこ}
「闇、猫、だ、と。
厭な名前だな」
{おれ、みえない。
みたら、もっといやな、きぶん、なる。
やみの、なかの、くろねこ。
しかも、ほとんど、ばけねこ}
「自分で云ってりゃ世話ないや。
一体全体、何でお前のようなものが現れたんじゃ」
{まつごのめ}
「末期の眼、かい。
つまり、ボクは、いや、ボクたちは末期の存在というわけか」
{でなければ、おれ、でてこない}
「退屈しのぎには、なりそうだな」
{そうよ。
おれ、おしゃべり。
おれ、あさやまかんきち、うまれかわり}
「朝山完吉先生の、生まれ変わりだと。」

ボクに触れた感覚だと、小悪魔という感じだがね。
尻尾の先、尖ってやしねえか。
だいたい、生まれ変わりに、一体、どういう意味があるんだい。
『暗殺論』の講義でもしてくれるのか」
{いみ。
いみ、なんか、いみ、ない。
おれ、あんたたち、たすけに、きた}
「ケケケ。
笑わせるじゃないか。
闇猫が、ボクらを助けるだなんて」
{よびすて、やめろ。
おれ、いだいな、てつがくしゃ}
「仕方ない。
偉大と、自分で云うなら仕方ない。
それなら、先生とでも呼ぶか」
{しかたない、とは、しつれいせんぼん。
おれ、そのいいかた、きらい。
せんせいと、いわれるほどの、ばかでなし}
「仕方ない。
それなら、教授にしようか」
{きょうじゅ、きょうじゅ。
うん、いいひびき。
かんきちも、よろこぶ}
「それなら教授。
早速脱出方法を教えてくれや。
それとも腹ごなしをするかい」
{きゃつとふーど、あるのか。
ふん、じょーだん。
やみねこ、えさなんか、いらぬい}
「勿体ぶってねえで、早く教えろやい」
{それ、ひとにたのむ、ことばか}
「人じゃねえから、いいだろ。
とにかく細かいことには、眼をつぶれよ。
そうでなくとも疲れるんだからな」
{おたがい、めは、つぶれたもおなじ。
もっとも、おれ、しんがん、あり}
「牝猫じゃなけりゃ、睾丸くらいあるだろうよ」
{こうがん、ちがう、しんがん}
「解ってるよ。」

心眼、だろ。

猫はからかってみたくなる」

{やみねこ、よびかただけ。

やみねこ、あくま}

「やっぱり、悪魔かよ。

ふざけるな、時間の無駄だ。

さっき朝山完吉教授の、生まれ変わりと云ったではないか」

{すまん。

ことばのあや。

まったく、うるさい、おやじ。

べつのおやじ、おとなしい}

「別の親父は、大人しいんじゃないよ。

こいつは大悪魔だから、小悪魔が出てきて、戸惑っているだけさ」

ここで、荒野はようやく口を開く。

「ソナコトハ、アリマセン」

「そんなことって、どんなことだい。

悪魔ってことか、戸惑っているってことか」

「両方デス。

私ガ大人シイノハ、黄金仮面ガ、紛失シテシマツテ、外界ニ、脱出デキタ時、ド
ソナ顔ヲ、スレバヨイノカ、ソレヲ考エテイタノデス」

「ケケケ。

どんな顔って、君の顔はボクの顔と同じ。

どんな顔をしようと、こんな顔さ」

「麻暮サンハ、ドコマデモ意地悪デスネ。

ソナニ意地悪ダト、闇猫、イエ、教授ニ食ワレマスヨ。

プフイ」

「莫迦を云っちゃいかん。

ボクは、闇猫、いや教授を、どうやって料理しようか、思案中さ」

「すくいのかみ、りょうり、するか。

〈あさぐれせいさく〉、だっしゅつ、しんじられないか」

「ケケッ。

ボクの名前、正しく云ったのは教授だけだよ。

この荒野だって、〈まぐれしょうさく〉って、呼ぶんだ」

「麻暮サンダツテ、私ノコト、〈あらのだいざぶろう〉ト、呼ビマスヨネ」

「ちがうのか」

「正シクハ、〈こうやおおさぶろう〉、デス」

「それは失礼したな。

人名は間違えちゃいかん。

それにしても、〈こうやおおさぶろう〉とは、恐れ入った」

「〈あさぐれせいさく〉モ、似合イマセンネエ」

「番号で呼ばれるよりもいいがね」

「番号デ、イインデスヨ。

現代ノ人間ハ、ロボットヨリモ、程度ガ悪イ。

将来ハ、ロボットニ名前ガ付イテ、人間ハ皆番号ニナルデショウ」

「君は、どういう観点、どういう根拠で、程度が悪いなんぞと云うんだね。

君の両腕、かつての川上宙衛門と木下弁太郎、そして最近の川上宙門と木下太郎などは、ボクも困ったくらい有能だと思うがね」

「本当ニ有能ナラ、麻暮サント麻暮サンノ配下ニ、殺サレタリシマセンヨ。

プフイ」

「荒野大三郎ともあろう者が、私情で人間の価値を判断するとはねえ。

ケッケ。

嬉しくなったぜ」

二人の会話は続き、闇猫が、不満の声をあげる。

{おやじども。

おれ、なかまはずれ、きらい}

「それもそうだな。

では君の意見はいずれ聞く事にして、まずは闇猫教授の力を借りて、脱出だ」

{むし、よすぎる}

「もしかして、何か条件があるのか。

何が欲しいんだ。

金はないが、魚の缶詰ならいくらでもあるぜ」

{じょうけん、ある。

それ、あたりまえ}

「この際だから、何でも聞くぜ」

{おれ、なぞなぞ、だす。

おまえたち、こたえる。

それ、できたら、だっしゅつ}

「何だ、そんな簡単な事か。

ボクは頭が悪いが、荒野に答えられない謎はない。

たぶん」

{ゆだねるのか。

てきに}

「敵だろうと味方だろうと、苦手な事は委ねる」

「イイデショウ。

サア、教授ヨロシク」

{あさぐれせいさく、だめおとこ。

こうやおおさぶろう、よかおとこ}

「何とでも云え。
大悪魔と小悪魔で、よろしくやってくれや」
{いやみな、やつ。
それでは、なぞなぞ。
てない、あしない、なにものか}
「随分簡単デスネエ。
ソレハ達磨サンデショウ」
{ざんねん。
こたえ、へび}
「ヤッパリ。
蛇ニシヨウカト」
「だって、おれ、てない、あしない、ひと、いわない。
だるま、てない、あしない、じゃない。
て、なくなった、あし、なくなった」
「ヤッパリ。
ソウ云ワレレバ、ソウデスヨネ」
{やっぱり、おもったら、それいう。
こうかい、さきにたたず。
では、もういちもん。
さんもんちゅう、にもんで、ごうかく}
「今度ハ、ヤッパリ思ッタラ云イマスネ」
「うまと、しかは、ばか。
では、ぶたと、おんなは」
「ソレハ、ヤッパリ、豚姫デショウ」
{あたり。
さすが、〈こうやおおさぶろう〉。
ちなみに、おれ、むすめ、ねこひめ。
〈あさぐれせいさく〉なら、ぶす、こたえたはず}
「はずれ。
ボクは、豚と女なら、豚カツ食うおぼさんだな」
麻暮が応じたので、闇猫は舌打ちをして、
{はなしに、ならん。
だっしゅつ、〈こうやおおさぶろう〉だけにする}
「私タチハ、一心同体デスカラ、フタツニ分ケラレマセン」
荒野の言葉に、麻暮は、
「ボクは、君みたいに、こんな化物を信用したりはしないよ。
脱出なんて、言葉の綾。
この闇猫は、腐った猫みたいなもんさ。
煮ても焼いても食えない」

{すきなだけ、いえばいい。
あさぐれ、しぬ、こうや、たすかる}
「助かって、またボクにやられるだけさ」
「だれも、きいてない。
それでは、なぞなぞ、もういちもん」
「マダアルノ」
{さんもんちゅう、にもんで、ごうかく。
おれ、いったよね}
「云ッタヨウナ、云ワナイヨウナ、聞イタヨウナ、聞カナイヨウナ」
{ような、だめ。
おれ、あいまい、きらい。
おれ、いった。
おまえ、きいてない。
それでいい}
「サスガハ教授。
デハ、次ノ謎々ヲ」
{おれ、あさやまかんきち、うまれかわり}
「デハ、『暗殺論』カラノ引用デスネ」
{やはり、こうや、あたまいい。
おまえの、ぶか、ぜんぶ、とうだい。
あさぐれ、あたまわるい。
おまえの、ぶか、ぜんぶ、ちゅうそつ}
「東大ト中卒デ、頭良イ頭悪イ、関係ナイデス。
麻暮サンノ部下達、頭イイカラ、私ハ苦勞シマシタ」
{じつは、おれ、ちゅうそつ}
「闇猫も学校行ったのか。
朝山完吉先生の生まれ変わりなら、京大だろ」
{きょうだい、ちゅうそつ。
あたまいい、あたまわるい、かんけいない}
「もう荒野に感化されちまったのかい。
口ほどにもない教授だな」
{こうや、あさぐれ、だまらせろ。
なぞなぞ、それからだ}
「トイウワケデスカラ、麻暮サン、ヨロシク」
「ふん」
それきり麻暮は押し黙った。

{よろしい、しずかになった。
では、さいごのなぞなぞ}

「ドウゾ」
{にんげん、なぜ、ひと、ころす}
「ソレ、謎々デスカ」
「おれ、なぞなぞ、いうたら、みんな、なぞなぞ。
もんく、あつか」
「文句ナシ。
デモ、難シイ謎々デスネ」
荒野は闇の中で腕組みをした。
{うで、くむ。
それで、こたえ、でるか。
でる、おもう、あさはか}
「静カニ、シテ下サイ。
コッチモ、命ガカカッテイマスカラ」
{りょうかい。
かいかい。
おしり、かいかい}
「ソレ、謎々ノヒントデスカ。
ソウデナイナラ、オ静カニ」
闇猫も押し黙った。
荒野の唸り声だけがあった。

「人間、何故、人、殺ス。
ソノ答ハ、人間ダカラデショウ。
人間ハ、未熟ナモノデス。
生キテイテモ、仕方ノナイモノデス。
未熟ナ人間ガ、未熟ナ人間、殺ス。
コレ、当然デハアリマセンカ。
ネエ、教授」
{なっちょらん。
こたえに、なっちょらん。
もうちっと、たんじゅんに、かんがえろ}
「ソレデハ、単純ニイキマショウ。
人間ニ、生ガアルカラデス。
生ガナケレバ、殺シタリ、殺サレタリシマセン」
{こうや、やるな。
あたらずとも、とおからず。
ならば、おまけ。
なぜに、にんげん、せい、あるか}
「人間ニ生アルハ、神様ノ所為」

{それ、だじゃれ。
こうや、あくま。
あくま、かみさま、しんじるか}
「私ノ事、悪魔云ウハ、麻暮サンダケ。
私ノ事、周りハ、神様ト呼ビマス」
{ならば、にんげん、せいある、おまえのせいか}
「ソノトオリデス。
プフイ。
私ガ、人間ヲ全滅サセレバ、最早、人間ニ生ハアリマセン。
生ガナケレバ、死モアリマセン」
「なるほど。
なるほど、だが、なぞなぞ、こたえ、ちがう。
まだ、わからんか。
もっと、もっと、たんじゅん」
「解リマシタ、教授。
人間、何故、人、殺ス。
殺シタイカラデス。
殺シタクナケレバ、殺シマセン」
{あたり。
おおあたり。
にんげん、したい、すき。
したい、したい、いきる、かて}

ここでようやく麻暮が口を挟む。
「死体が好きな奴は変態じゃ」
{あさぐれ、うるさい。
こうや、あさぐれ、だまらせろ}
「麻暮サン、ヨロシク。
喋リタイ欲望、オサエテネ」
{おれ、いいたい。
にんげん、よくぼう、だいすき。
よくぼう、なくなる、にんげん、なくなる。
ころす、よくぼう。
にんげん、さつじん、とまらない}
「そうよ、そのとおりでよん。
おぞましき【死んだる団】は、欲望の権化。
つまり、産みの親こそ、欲望の大権化。
ボクの仕事は、欲望の大権化を世界から消滅させること。
闇猫よ。

教授よ。

貴様は、欲望の大権化を、この暗闇から救おうというのか。

もしそうなら、ボクは、欲望の大権化を倒す前に、大権化の救い主を倒さねばならないね。

ケケツケツケ」

{おれ、きらい、そのわらいかた。

おれ、すき、こうやのこえ。

あさぐれ、げひん、こうや、じょうひん。

にんげん、かち、きまる。

じょうひん、げひんで、にんげん、かち、きまる}

「闇猫、覚悟」

鋭い叫びと共に、麻暮が手にした葡萄酒の壺が、暗闇に振りおろされた。

暗闇の闇猫に。

「ぎゃ」

と一声あげて、闇猫は潰れた。

「麻暮サン、教授ヲ、殺シタノデスカ。

化ケテ出マスヨ」

「化け猫は嫌いじゃない。

だが、闇猫は、消さねばならない」

「可哀想ニ。

相変ワラズ、残忍、冷酷デスネ」

「闇猫は、君だけを救おうとしていた。

君の配下だろ」

「邪推デス。

教授ハ、私タチノ無聊ヲ慰メルタメニ、突然変異デ誕生シタノデス」

「何の突然変異だ」

「ソレハ、放射能ノ突然変異。

ゴジラデナク、闇猫デヨカッタノニ」

「ボクはゴジラがよかったね。

ゴジラは、闇猫みたいにお喋りじゃない」

「イズレニシロ、私タチノ脱出ハ、マタ不可能ニナリマシタネ。

プフイ」

「ボクは、もう脱出なんぞ考えてはいないよ。

君の最期を見届ける事が、至上の喜悦さ」

「コノ闇デハ、見届ケル事モ、マタ不可能デショウ。

プフイ」

「屁理屈を云うな。

ボクの心眼を信じていないのかね。

ケケケケケケ、ケケケケケケケ、ケケケケケケケケ」

麻暮の嬌声が、闇の中で響き、轟いた。